

フロイトの矛盾

フロイト 精神分析の精神分析と精神分析の再生

ニコラス・ランド
マリア・トローク

大西雅一郎訳

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

Nicholas RAND et Maria TOROK

QUESTIONS À FREUD

Du devenir de la psychanalyse

© LES BELLES LETTRES, 1995

This book is published in Japan by arrangement with LES BELLES LETTRES,
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

フ
ロ
イ
ト
の
矛
盾

目

次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序論 フロイトに問いを提起する理由は何か？ 11

第Ⅰ部 フロイト理論の基礎にある諸矛盾

第1章 夢の解釈——自由連想あるいは普遍的な象徴体系 20

第2章 心的現実という観念とその罟——「現実」と「ファンタズム」のあいだでの揺らぎ 36

第Ⅱ部 イェンゼンの『グラデーヴァ』に応用された精神分析

第1章 前置き——問われる応用精神分析 62

第2章 イェンゼンの『グラデーヴァ』における喪の病と再生——文学的精神分析の試み 72

第3章 フロイトとポンペイ、抑圧されたものの回帰あるいは埋葬された死？ 99

第Ⅲ部 精神分析の伝達

第1章 精神分析の歴史に見られる局所構造のなかのパラドックスと秘密

——フロイト・フリース、エミー・フォン・N、秘密会議、シャーンドル・フェレンツイ

第Ⅳ部 フロイトの精神分析的理解に向けて

第1章 方法論についての見取図 172

第2章 資料を通してみたフロイト家の破滅的出来事 179

第3章 フロイトの自己分析、および彼の伝記に関する研究分野

第4章 フロイトの夢、家族を襲った破滅的出来事の証言者たち

第5章 ジークムント・フロイトの精神分析的理解に向けて 263

204 191

結 論 268

初 出 270

訳者あとがき 271

索引

人 名 286

事 項 284

著 作 280

SAMPLE
Shoshi-Shinshui.com

凡例

- 一、「」は原書における挿入注、「〔 〕」は訳者による挿入注である。
- 一、原書における脚注は部ごとに通し番号がつけられており、訳書でもそれを踏襲した。
- 一、人文書院版『フロイト著作集』、岩波書店版『フロイト全集』の巻数（算用数字）とページ数（漢数字）は次のように表記した。
「精神分析運動史」、人文10―二六五頁
「精神分析運動史」、岩波9―一〇頁
- 一、フロイトの邦訳の扱いについては、原則として人文書院版を利用したが、異同の大きい場合は岩波書店版を利用した。なお、原文との関係で少し変更を施している場合がある。
- 一、索引は書肆心水が作成した。原書に索引はない。

フ
ロ
イ
ト
の
矛
盾

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

われわれはこの著作をニコラ・アブラハム（一九二九—一九七五年）の思い出に捧げる

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序論 フロイトに問いを提起する理由は何か？

精神分析に内在するさまざまな可能性を実りあるものにしたという思いから、われわれはフロイトに対していくつかの問いを提起する。科学者ならば、たとえば分析理論が真実かどうかを検証する際の規準に関心をもつだろうが、われわれの発する問いはそうした問いではなく、また社会学者・人類学者ないし哲学者ならば、社会組織の理解に対して、あるいは主体の定義に対して、精神分析がもたらす寄与を検証してみたいと考えるだろうが、われわれの問いは、彼らの発する問いでもない。われわれの問いは精神分析家・研究者の問いであって、それゆえに、その視点は他の学科の尺度で精神分析を測ることを許さないし、精神分析の意図とは別の見方の意図に則して精神分析を評価することも許さないだろう。とはいえ、精神分析そのものから見ても、フロイトの行う理論化には内的なさまざまな矛盾や断裂が生じている。われわれの目的は部分的にそれらを明らかにすることであった。そして、それらが、分析を行う人々と同じく分析を試みようとする人々の心のなかで、秘かな形ではあるが途絶えることなく作動している様子をいくつか理解したいと思ったのだ。

われわれも以下にそのことを強調することになるが、フロイトの呈する諸矛盾の程度が実際、逆説的な理論体

系に見られるように重大なものならば、それらの矛盾に対してどのような態度をとるべきであろうか。精神分析はその基礎からして欠陥があるので拒絶したほうがいいのだろうか。矛盾には目を閉ざして、われわれなりの、まったく個人的なやり方で分析を検証し実践し続けなければならないのだろうか。より統一された新たな精神分析を打ち建てるために、矛盾から自由になったほうがよいのか。こうしたことはどれもわれわれには、ありうるであろうし、想像はできるように思われる。しかしながら、ここで、われわれにとって重要なのは、この理論に対してどのような態度をとるかではない——忠実か忠実でないか、すべてひっくり返して拒絶するか、批判せずに受容するか、あるいは、選択的に利用するか——、そうではなくむしろ、事情を十分に踏まえたうえで、またフロイトの思考が互いに相容れない矛盾のうえに進展していることをわきまえたうえで、精神分析という構想そのものを再考する柔軟な姿勢をもつことである。

精神分析を基礎づけるテクストを再読して、そこに含まれる内的な諸矛盾を暴き出すことには、どのような利点があるのか。そうした後ろ向きの作業で、精神分析のその後の進展や、フロイト的ではない精神療法の展開を無視することにならないのか。われわれがさまざまなパラドックスを明らかにしたいと思う理由は、われわれが考えるに、パラドックスがほぼ一世紀前と変わらずに根強いままであり、現在でもフロイトの時代と同程度の力をもって作用しているからである——しかもそれは、精神分析を専門的に伝達する方法の結果としてそうなのだ。フロイト理論を伝達するのは分析そのものであり、結果としてこの理論を実践するのは、現時点では訓練中の被分析者であるものの、今度は自分自身が将来は分析家となる者なのである。確かに、分析は最良の場合には他者に耳を傾けるよう準備してくれるだろう。しかしながら、こうした形式の教育が、知らないうちに、いくつもの論理的な不整合を保ち続けている危険はないのだろうか。そして、精神分析がそれ自体において分割されており、

それ自身に相反するという事実を考察することは被分析者には困難であるということ、これがおそらくこの不整合のうち最も際立ったものであろう。強調しておきたいが、われわれが望んでいることは、フロイトのこれこれの概念が誤っているとか、あるいは、より最近の広範な研究から別の概念を借用したほうが、そうした概念の修正にはふさわしいだろう、といったことを示すことではない。もし断層が存在するとしても、それは認識論や実践に関しての誤りというレベルではない。われわれが明るみにもたらず矛盾は、フロイトの思考方法の核心から生じている。たとえば、分析においてトラウマや幼児期のファンタスム「幻想」に対してどのような位置づけを与えるべきか問い続けている人間はわれわれのあいだにもまだ数多くいる。こうした揺らぎ——また同じような多くのほかの揺らぎ——、フロイトはそれを自分の理論の最も奥まった片隅のなかにまで刻み込んでしまった。その結果、われわれは自分たちが知らないあいだに、そこから啞然とするような遺産を担っていることになる。われわれの研究の利点は、方法的に引き裂かれた状態をほとんど無意識的に伝達することを停止させることにあるだろう。というのも、そうした分裂状態においては、ものごとの理解へと向かう道と理解を閉ざす道とが見分けたいほどに混じり合っているからだ。

フロイト理論の多様な矛盾の一つひとつは、それらを生み出した者の心的生活の症状として検証する必要がある。われわれはどのようにしてこうした想定に到達したのか、そしてどのような結論をそこから引き出そうとしているのか。われわれは、フロイトが切り開いた伝統における受取人なのである。われわれは、フロイトに対して分析的態度をとらないことはできない。フロイトの思考を拒絶、変更、改善すること、こうしたことはすべて可能である、だがそうした選択肢では脇に置かれてしまう視線がある、それは本来の分析的視線であり、理論的な諸矛盾の奥深い意味についての問いを提起する視線である。われわれは、フロイトが欠陥のある理論を使

用しているのだと言って満足しているわけにはいかないだろう——ある科学理論ないし数学の定式に対してそうする人々もいるが——、なぜならば、分析の思考方法は、意味の源泉の探究、さらには個人的な意味の源泉であって苦痛をもたらすことの多い隠れた源泉の探求を目指すものであるからだ。われわれが、フロイトにおける方法的なささまざまな分裂の起源を位置づけるならその瞬間から、もはやわれわれは、それらの分裂を自分たちのこととして引き受けなくてもよくなるし、ジークムント・フロイトの家族にかかわるトラウマがもつ困惑を引き起こす諸側面を遺産として継承している状態——遺産の継承は数世代におよぶ精神分析の共同体に定着してしまっている——から自分たちを解放できるであろう。

この著作がその一部をなす研究は、一九七七年から始まる一連の講演と論文によって順次進められてきた。講演と論文は最初、マリア・トロークが単独で発表し公刊したもので、その後は共同で、フランス、ドイツ、イギリスまたアメリカで発表、公刊したものである。ほぼ三十年にわたって続けられてきた日々の分析実践と、われわれのうちの一人が先行して行ってきた理論的作業に依拠するならば、フロイト流の精神分析に対していくつかの問いを提起することも、われわれには有益だし重要なことだと思われた^①。

われわれにとって、フロイト抜きに考察を行うことは不可能である。無意識、症状を介しての葛藤の象徴化、局所構造という考え、複数の審級、夢の作業といったものは、われわれの日々の知的なパンであり、その発酵を促す。われわれはフロイトの発見を呼吸しているのだ。フロイトの主要概念——心的生活のなかにセクシュアリテを体系的に導入すること、成人の理解にあたつての子どもの重要性、心的な表出には奥深いあるいは潜在的な意味があること、分析状況における転移、文明のなかの居心地の悪さ、さらにはセクシュアリテと社会が問題を孕

んだまま交差していること——を抜きにして、これらのフロイトの発見すべて、および他の諸々のことを抜きにして、情動と理論に関するわれわれの遺産を想像すること、それはわれわれにとって、空気を吸うことなしに呼吸しようとするようなものであらう。しかしながら、一定の概念に対してわれわれははつきりと留保をする。たとえば、女性におけるペニス羨望、死の欲動、月経としての欲求不満、普遍的なコンプレックスなどである。

これまで長く、われわれは二つの立場のあいだで板挟みになっていた。一方では、われわれをブシュケー「魂」の神秘へと導き入れてくれたことでフロイトへの感謝の念を抱いているが、他方では、理論と臨床に関して難点があるという意識が徐々に高まり、批判なしにフロイトに従うことはできなくなっている。したがって、数ある問いのひとつだが、次のような問いが提起されている。つまり、一八九七年にフロイトが、ヒステリー患者におけるトラウマの現実性という最初の仮説を、欲動に起源をもつファンタスムのほうが優先するという考えで置き換えようとするのだが、われわれは彼の説に従うことはできるのだろうか。精神分析という理念にわれわれが抱く尊敬の念からはフロイトの構想に対して忠実でなければならぬのだが、それと同時に、夢の象徴体系あるいはリビドーが段階を踏んで継起的に発展するといった、フロイトの基本的な概念のいくつかは、そのままでは

(1) 問題となっている作業は以下の通りである。ニコラ・アブラハムとマリア・トローク『狼男の言語標本』、オービエ
 ムフラマリオン社、一九七六年（邦訳、港道隆、森茂起、前田悠希、宮川貴美子訳、法政大学出版局、二〇〇六年）、『表皮と核』、オー
 ビエムフラマリオン社、一九七八年（邦訳、山崎冬太、大西雅一郎監訳、松籟社、二〇一四年）、『ヨナ』、フラマリオン社、一九八
 一年、『リズム——作品、翻訳、精神分析について』、フラマリオン社、一九八五年。このような作業により精神分析に理
 論的、臨床的な刷新がもたらされた。名を挙げたこの四冊の著作は、まさにそのようなものとして、フロイトに対してわ
 れわれが提起する問いの基礎であり延長でもある。全体を概観するには、ニコラス・ランドの「精神分析の刷新」、『レ・
 タン・モデルヌ』誌、第五六四号、一九九三年七月を参照されたい。

序論 フロイトに問いを提起する理由は何か？

応用するわけにはいかないときに、どうすればよいのだろうか。

われわれにとって、この板挟みの状況に対する回答はひとつしかないことがやっとわかった。それは、われわれなりのやり方でフロイトのテキストに立ち戻ってみることだ。それは、われわれが留保なく同意することを妨げているものが、彼の考え方のなかの何であるのかを鮮明にするためである。われわれが研究を進めるなかで、またわれわれが大いに驚いたことだが、彼のテキストはわれわれには、内的な理論的分裂を抱えているものと映った。いいかえれば、フロイト流の精神分析はその内側から脅威にさらされているように思える、というのも、そこには大胆な探求方法と、自由な発見の制限とが同居しているのだ。フロイトの最も偉大な発見——性的な要素の重要性、夢の作業、症状形成の諸経路——は、彼を理論と臨床に関する難題のなかへと導いていった。そこにはいわば内部に巢食う悪しき霊が存在する。最も豊かな実りをもたらし、最も独創的な考え方が、その生みの親に罠を仕掛けるのだ。これらの罠のいくつかを切り離すこと、罠のメカニズムを明らかにすること、最後に罠の存在理由を見出すこと、以上がわれわれの計画の核心である。並外れた開放性を発想源とするフロイト理論が、閉鎖的な実践と否応なく衝突するのはなぜなのか、われわれは結局、この問いに答えたいと思う。

われわれが、古典的な精神分析的なテーマ——夢やトラウマ、誘惑、ファンタズム、文学に応用された精神分析など——を扱う理由は、問題の矛盾が周縁的な領域にかかわることではまったくなく、最も注目され研究された根本的な概念構築にかかわるからだ。理論化から生じるこれらのパラドックスによって、分析家の日常の作業と精神分析研究者の考察は被害をこうむっている。精神分析を思考し実践する者には、フロイトの打ち建てた構築物の内的な分裂の広がりとその帰結を測定する機会ないし可能性がなかったように、われわれには実際思われる。というのも、彼らは理論のこれこれの方向性を、フロイトないしフロイト主義を真の意味で正当に代表す

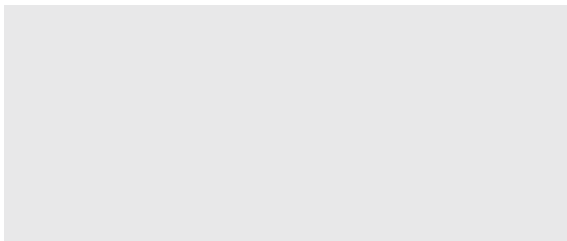
るものとして暗黙のうちに選択してしまっているからだ。われわれに関しては、あらゆる選択を行う前に、問題の矛盾を元通りの純粹な状態へと戻すことが重要なことである。そうすることで、矛盾が白日の下にさらされることになり、公然と矛盾について語ることが可能となるだろう、また矛盾が人目につかない状態に陥ったり、われわれの知らないあいだに、混乱を引き起こす効果を撒き散らしたりせずにはすむようになるだろう。したがって、本書でのわれわれの目的は、さまざまなパラドックスが体系をなしており、フロイトの思考のあらゆるレベルを横断していることを示すことにある。

われわれとしては、読者が、第一段階として、自分に有益と思えるような結論を抜き出す手間は読者自身に任せておく。というのも、われわれの当初の願いは、フロイトのテキストとともに、またそのテキストをめぐって新たな議論を開始することであり、精神分析理論の総体のまさに内部での意見の交換を提案することであるからだ。

*

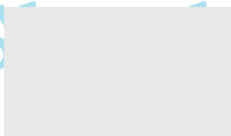
いうまでもないが、この作業はフロイトの学説の根本的な批判である。われわれは精神分析が再生されるのを望んでいる。簡単に言えば、われわれが勇気づけ支えたい人たちとは、心の奥底で、精神分析が発見したことの核心を救済したいと思いつつも、西暦二千年にもなるうとする時点で、ひるむことなく精神分析の構想そのものを徹底的に再考する必要性に立ち向かう人たちである。したがって、精神分析とは異質な方法的規準を使つてフロイトの企図を攻撃する人たちとは、われわれとはつきりと対立する。精神分析に科学的な身分を認めるかどうかという議論に埋没するよりはむしろ、われわれは内的な一貫性を唯一の基準として重要視したい。フロイ

トの理論はわれわれから見れば、自律的で自己充足的なさまざまな集合であって、それらは内的な一貫性をもつことで、あるいは欠いていることで、確証されたり否定されたりすることになる性質のものだろう。以上のことから、いくつかのテキストについての本書の概念分析がとる方法的な方向づけがはっきりと出てくる。これらのテキストについては、おそらくは戦略上の必要からフロイトの規範的文獻から選択されている。批判をわれわれが行うからといって、精神分析が人間存在を理解するための、また人間存在による、なかでも文学的な創造物を理解するための比類のない方策であるとして精神分析を擁護することには少しの障害もあるまいし、むしろその反対だ。それゆえ、精神的な発想は必ずや、そのもてる豊饒さを発揮するにちがいないと、われわれは考える——もつとも、フロイトの構築物の内的な断裂状態を認識したうえであるが。そのうえで、分析家であり研究者であるわれわれとしては、次のような二つのものを識別する努力を遠慮せずに行えばよい。すなわち、一方では、プシュケー「魂、心」の研究を偏見なく推し進めてくれるようなフロイト主義（あるいはその変異体）のこれこれの側面と、逆にこの研究を危機に陥れかねない側面との識別である。



第 I 部

フロイト理論の基礎にある諸矛盾



SAMPLE
Shi-Shinsui.com